奄美大島におけるリュウキュウマツ林の現況

自然・環境再生研究部　生物資源研究グループ　黒田有寿茂

奄美大島中南部の内陸域には国内最大規模の自然性の高い亜熱帯照葉樹林が残されています。一方、この核心地域に残された樹林を除く大部分の森林は伐採などの後に再生した二次林で、リュウキュウマツ林はその一つです。

島内のリュウキュウマツ林では近年、マツ材線虫病によるマツの枯死（松枯れ）が広範囲に及んでいることが指摘されています。その現況を明らかにすることは同島の森林生態系の保全管理施策を検討していく上で重要です。

そこで本研究では、奄美大島の各所を回りながら松枯れの状況を調べました。その結果、かつて伐採、利用されていたリュウキュウマツ林（右写真中の残存マツ林）は、松枯れとその後の遷移によりほとんど残されておらず、島内全体で広葉樹林化が顕著に進行していることがうかがえました。同島は生物多様性保全上重要な地域であり、現況を捉えた最新の植生図の作成が望まれます。

写真　奄美大島でみられるリュウキュウマツ林

左上　残存マツ林　尾根部にリュウキュウマツ高木が残存している
右上　再生マツ林　法面でリュウキュウマツ低木が優占している
下　　枯損マツ林　枯れたリュウキュウマツに代わり広葉樹が繁茂している

奄美大島で現在みられるリュウキュウマツ林の多くは、樹形が円錐型のリュウキュウマツ低木からなる若い「再生マツ林」である。樹形が傘型のリュウキュウマツ高木が林冠を構成する「残存マツ林」と、リュウキュウマツの立ち枯れ木が残る「枯損マツ林」では、いずれも下層で広葉樹が優占している。